年々歳々

OB 会会長　22 期　黒崎　敏男

まずは、昨年末発行の第 34 号の添付書類の件について改めてお詫びします。多くの会員の皆様にご迷惑とご心配をおかけしましたが、幸い、送付代行業者にも真摯に対応頂き、当会からは一切の追加支出なく 3 月末には希望者への次期会費への充当、返金又は寄付の処理を終了し、一件落着となりました。今後の教訓とさせて頂きたいと思います。

さて、今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、我々も例外なく何らかの影響を受けることとなってしまい、活動の機会を失って残念な気持ちで過ごされた方も多かったことと思います。本誌の記事中にも多くの部分にそのことが記されています。

そうはいってもということで、自分自身は今夏、別ルートで 2 回白山に日帰登山し、最低限のノルマは達成したのですが、どうも年々歩みが遅くなっていることがはっきりしてきまして、若い頃は目と鼻の先にしか思わなかった中飯場と甚之助小屋の間の遠いこと。「これはおかしい」などと感じたものの、おかしいなどあろうはずもなく、単に遅くなっていただけのことでした。足が痙攣したり、膝が痛くなったりすることを恐れ、体を労わりごまかしながらの山行は何とも情けなく、先輩方から他人事として聞いていた「衰え」というものがいよいよ我が身にも訪れたかという実感がひしひしと押し寄せてきました。

これは一人の人間にとっての必然的な変化ですが、当会のような団体の活動にも相通ずる部分があるようにも感じます。活動を起こし、支えてくださった皆様も高齢を迎える中、そろそろ会としてもこれまでの活動を振り返り、後世に記録を残したり、今後の活動内容への合意形成などを通じ、無理のない形で次の世代の方々にこれまでの皆さんの熱意とか精神のようなものを引き継いでいくことができれば嬉しいと考え始めた次第です。

一つの提案ですが、ご自宅にある KUWV 及び OB 会関係の資料等で譲ってもよいと思われるものをお持ちの会員には巻末の OB 会長のアドレスまでご連絡くだされば引き取りの手段を相談した上、ひとまず、会長が保管し、然るべき時期に複数の役員でそれらの保存、廃棄やその手段を決めて対応するようなことをしてはどうかと考えます。

懐かしい青春の記憶ですから最後まで手元に置きたいと思うものが多いとは思いますが、特に部誌「Bergheim」や OB 会報「やまざと」については散逸を避けることのできる機関にまとめて寄贈し、必要が生じた場合にだれでも閲覧できるようにしておくのが妥当ではないかと思料します。(既に先輩方によってほとんど対応済のため、補完的に行う。)

その他、本誌の在り方や山小屋の今後についても多くの方々から示唆に富む様々なご意見を頂戴しており、次の機会にはそれらについて紹介するとともに、次期総会での提案又は話題とすることを一つの目安として時間をかけて内容を整理して行きたいと思います。

私自身もできるだけ多くの会員の皆様と直にお話しする機会をもつよう努力してみますので、お会いできた暁には忌憚のないご意見を承りたく存じます。何卒よろしく。